

---

# 朝の物語

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

朝の物語

### 【Nコード】

N1596D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

電車の中でお互いが気になる男の子と女の子。けれど向こうの気持ちには気付かないで毎朝。けれどそれはふとした弾みで。高校生の恋愛ものです。

## 第一章

### 朝の物語

目が覚めた。また一日がはじまる。

「早くしなさい」

「わかってるよ」

お母さんにはそう言葉を返す。そうしてベッドから起き上がってパジャマを脱ぐ。それからすぐに制服に着替える。

台所に行くともう朝御飯ができていた。こんがり焼けたトーストにハムエッグとソーセージ、それにホットミルクだった。

「今日はパンなんだ」

「駄目？」

お母さんは洗いものをしながら僕に言葉を返してきた。もうお父さんは仕事に出ていてその分の食器を洗っていた。僕はそれを何となく見ていた。

「それがいいかなと思って」

「別にいいけど」

何となくパンを食べたい気分だった。だから文句はなかった。

「じゃあ早く食べなさい。もうあまり時間ないでしょ」

「うん、まあ」

お母さんの言葉に頷いて席に着く。そうして食べてすぐに席を立った。何か食べるのも随分焦っていた。自分でもそれがわかった。

「食べるの随分早くなったわね」

「そうかな」

お母さんのその言葉にはとぼけた。

「特に朝。どうしたのよ」

「別に」

答えるつもりはなかった。

「何でもないよ」

「そうなの」

「そうだよ。それじゃあさ」

食べ終えた僕は歯を磨いて顔を洗った。髪も少し整えてそれから家を出たのだった。

「行って来ます」

「お弁当は？」

「持ったよ」

それは忘れていなかった。きちんと鞆に入れた。ついでにだけれど今日の時間割の教科書とノートも入れておいた。実は気分的にはお弁当もついだったけれど。

「それじゃあね」

「車に気をつけてね」

お決まりの言葉を受けて自転車に乗って向かうのはいつもの駅。

けれど最近それがいつもの駅じゃなくなってる。それはどうしてか  
って？すぐにわかるぞ。

## 第二章

朝起きて学校に行く。 たったそれだけのことなのに。 最近私がおかしいように思えるの。

「行って来ます」

「はい」

お母さんに挨拶を受けて家を出て駅に入る。 家は商店街にあるからすぐなの。

駅まで行っていつもの電車に乗って。 さあ、また勝負ね。

「今日もいるかしら」

電車に乗る時に一人呟く。 そうしてあの駅に近付く。

あの駅で彼を見る為にあえて立って扉のところにおいて。 席は空いてるけれどそんなことはもうどうでもいいの。 彼を見る方が大事だから。

その彼のいる駅に来て。 いるのかいないのか。 この瞬間が一番気懸かり。 いないとそれで一日が終わっちゃうから。 いつも願うわ。 頼むからいてって。

プラットフォームが見えてきて。 それで目の前にいつもいるのだけれど。

いたわ。 ほっとして何だか嬉しくて。 そんな気持ちだけれどそれはあえて顔には出さないで。 知らない顔をして見ているだけ。 見ているだけだけれどちゃんと見ているんだから。

見ると向こうは知らない顔。 けれどそれでいいの。 私はこれで満足だから。 一日がこれで報われた気持ちになるの。 朝だけの話なのに。

今日も会えた。 それだけでいいんだ。

いつもこの扉の前に来てくれるから会える。 僕のことなんてきつと知らないし僕も言葉を交わすあてはない。 けれど顔を見られるだ

けでいいんだ。彼女の顔を。僕はそれだけで満足できるから。本当のことを言つとそれだけじゃ満ち足りないけれどこれでもいい。とにかく彼女の顔が見られればそれでいいんだ。

ちらりと見てそのまま向かい側の扉のところまで来て立っている。本でも読みながら彼女の顔をちらりちらり。それだけだけれどいいんだ。

自分の学校の側の駅まで来ると電車を出てそれで終わり。たったそれだけ。けれど満足して学校に行く。後はもうどうでもよかった。学校は何も変わったことはない。いつもの授業にいつもの仲間。変わりはないけれどそれでもこれまでとは違っていた。

「何かさ」

クラスメイトが僕に声をかける。

「御前変わった？」

「何が？」

「いやさ」

そう僕に声をかけてきた。

「身だしなみとか奇麗になつたし」

「そうだよな」

「そうかなあ」

とぼけるけれどそう言われた理由はわかってる。彼女を意識してそうした格好になつてゐる。自分ではしっかりとわかつてる。

「ああ、何となくな」

「格好よくなつたよな」

「だつたらいいけれどね」

苦笑いを浮かべたけれど心の中では違っていた。

「もてたらしいな」

「クラスの女の子達は結構言ってるんじゃないのか？」

「なあ」

「それもいいけれど」

ここであと少しで言つところだつたけれど。慌ててそれを止めた。

「いや、何でもないよ」

「そうなんだ」

「うん。けれどさ」

格好よくなっただって言われるとやっぱり悪い気はしないから。もつと凝ることにはしてみた。

「雑誌でいいのあったら教えてよ」

「ん！？ああ」

「それじゃあさ」

仲間に雑誌を教えてもらって勉強して。それでもつと格好よくなつて。そうしたこと勉強もはじめてみた。ちよつと彼女に振り向いて欲しいかなって思つて。

### 第三章

「メイク変えた？」

「何か」

「わかる？」

学校で皆の言葉を聞いて。笑って言葉を返したの。

「ちよつとね。奇麗系にしてみたの」

「ふうん」

「またどうして？」

「ちよつとね」

本当のところは言えないけれど。変えたのは本当。

「そっちの方が合うかなあって」

「いいんじゃない？」

友達はこう言ってくれたわ。じゃあいいのね。

「前よりもずっと」

「奇麗に見えるし」

「そう。じゃあメイクはこのままね」

それを聞いて安心したけれど。ここでもう一つ手を打っておくのが女の子。さて、次は。

「それで服はどうしようかしら」

「制服でもねえ」

すぐに答えてくれる友達がいるって有り難いわ。アドバイスも見

事だし。

「よくしないと駄目よ」

「よく？」

「そう、まずは」

私のスカートを手に取って。

「短くね」

「短く、ね」

「あんだ脚綺麗だから」

言われたのはそこ。まずは。

「それでその脚をね」

「どうするの？」

「ハイソックスかしら」

今度はこう言ってきたわ。成程、ハイソックスね。

「しかも黒」

「黒なの」

「色白いから余計にいいわね」

ふむふむ。それだと黒なのね。

「それでいつたらいいわ」

「わかったわ」

「それにね」

何か私を見る目が少し嫉妬めいてきていました。それはどうしてかというと。

「大きいわねえ」

「そうよねえ」

私の胸を見て言うの。

「この胸使わない手はないわね」

「そうね。ここは」

胸をつんつんと触ってきて。次の言葉は。

「ブローチがいいわね」

「ワンポイントね」

「ブローチなの」

てつきり派手にはだけるかと思っていただけ。これは意外だったわ。

「そうよ。ブローチで目を引くの」

「案外見えない方がいいのよ」

「こどもアドバイスを受けたわ。」

「それで決まりね」

「学校中の男の目を釘付けよ」

「それはちよつと」

考えてないっていつか興味がないっていつか。全然どうでもいい話だけれど。

「いいの？」

「じゃあ何の為のお洒落よ」

「ちよつとね」

言うつもりもなかったし。それは誤魔化して。

「ちよつとねえ」

「まあ言いたくなかったらいいわ」

皆それに首を傾げるけれど言わないのが吉で。何はともあれこれで彼がもつと私を見ることが間違いなくなつたわ。これでよし、と。

## 第四章

雑誌を見て勉強して格好を決めて。それでいざいつもの駅へ。

「何かキザになったわねえ」

「そうかなあ」

家を出る時にお母さんに言われてとぼける。

「色気づいて。何があったのか知らないけれど」

「別に何も無いよ」

とぼけたけれど口が尖るのがわかる。お母さんはそれを見て意地悪い笑みを浮かべて言ってきた。

「本当かしら」

「疑ってるの？」

「あら、隠してるの？」

逆にこう言われた。嫌な感じで仕方がないんだけど。

「違うって。だから」

「まあいいわよ。それに」

「それに？」

「時間よ」

「あっ」

お母さんに時計を指差されるとつい声が出た。見ればもう時間が無い。

「まずいよ、これって」

「馬鹿言ってる場合じゃないでしょ」

「馬鹿言っていたのはお母さんじゃない。そもそも」

「じゃあ遅れるのね」

また意地悪く言ってくるのが。何かもつと頭にきて。

「私は別にいいけれど」

「僕はそうはいかないし」

冗談じゃない。遅れたらそれだけで一日が終わっちゃう。しかも

こんな馬鹿なことだ。

「じゃあ。行って来ます」

「はいはい、それじゃあね」

後ろにお母さんの声を聞きながら自転車を出す。そうして駅まで飛んで行く。とにかく今すぐにも行かないと。とんでもないことになる。

これで電車に乗って。後は相手が来るだけね。

精一杯お洒落してスカートの丈も短くさせてハイソックスにして胸だつてブローチ付けたしメイクも念入りにして髪もシャンプーかけてコロンもしてるし。これで完璧ね、と自分では満足しているんだけど。

そこまで武装しないと男の子ってわからないって聞いているし。ともかくこれでいい筈。見ていなさい、絶対に振り向かせてやるんだから。

そうしたらどんな顔をしてやろうか。知らない顔にしようかしら、それとも勝ち誇った顔か。どんな顔を見せてやろうかしらって考えてたらその駅に着きました。いよいよです。

「あらっ」

見たらないけれど。これってどういうこと!?

「休み!?!ひよっとして」

風邪!?!それとも別の。遅刻なんて馬鹿なことだったらどうしようって考えていたら階段を駆け下りてやって来ました。何よ、心配させてって。

させてって。何、一体。いつもより全然格好いいっていうか。

「何、それ」

思わず電車の中で呟いちゃったし。何か私より全然いける感じ。驚いてると向こうも何か凄い顔で私を見てきました。

「えっ!?!」

声出てるわよ。一体何なのよ。

驚いた顔で電車に乗ってきてそのままいつもの場所に来るけれど、ずっと私を見ています。

私も向こう見えているし。完全に訳がわからなくなっていました。

何なんだって。言いたくて仕方ないっていうか。目の前のあの娘見てると冗談みたいに思えてきた。

普段と全然違う、いや前より遥かに奇麗で可愛いし。それに唾然ってしてずっと見てるけれど向こうも驚いた顔で僕を見て。何なんだろ、これって。

「あの」

何か彼女が口を開いてきたし。僕に。

「えっ、僕？」

言葉聞こえたみたい。私のこと意識してるのね。

「あのね、ひよっとしてさ」

「君、まさか」

有り得ないわよ、これって。こんなの本当に漫画とか小説とかだし。私が意識していると相手もって。それに今気付くなんて何なのよ、ドラマでも……これはあるわね。

「僕に見せようって!？」

「それは私が言いたいわよ」

彼女が言ってきたんだけれど。何かわかってきたことって。

「あれ!？私のことずっと見てたの」

「君もまさか僕を」

「そうよ」

ここまで来たら嘘とか言えないから。正直に言ったわ。

「ずっと見ていたわよ。今日だって」

言っちゃった。けれどもういいわ。話わかってるから。

「この格好もね」

「僕もだけれど」

そっだよ。勇気出して言うよ。

「君が見るかなあつて」

「最初から見えていたわよ。じゃあもう言つわ」

「僕も。言つよ」

「僕も一緒に言つたし。」

「私も一緒に言つたわ。」

「好きだよ」

「好きよ」

二人同時に言ってしまったドラマはこれで終わりかな、なんて思っている。

電車の中の皆が見て恥ずかしい感じ。けれど。何か朝のほんの一日がこれでいつも続くって思うとついつい笑えて。それでいいかな。今度から朝だけじゃないから。彼女とずっと一緒にいられるのに感謝。

朝の物語

完

2007・10・15

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1596d/>

---

朝の物語

2008年11月7日07時03分発行